

## 「ただのブンガク」の日々と弟子未満のこと

難波 美和子（熊本県立大学准教授）

筑波大学比較文化学類出身者で文芸言語研究科に進学したにもかかわらず、私は学類では一度も荒木正純先生の授業を履修したことがない。地域研究専攻（文化人類学コース）だったからで、今にして思えば、後悔がないこともない。特に、イギリスでの在外研修から帰国したばかりの荒木先生の、熱気に満ちた講義に接した友人たちの話を聞くとときには、しかし、文化人類学の授業もとても面白かったので、その件はひとまず置く。

実は私が荒木先生に初めてお目にかかったのは、文芸・言語研究科の文学専攻を受験するということになってからである。ご挨拶をしたのは、失敗した受験の“後”だった気がする。人杜棟5階のあの研究室の前で、にこやかに対応してくださったと記憶する。それ以来、実に20年が過ぎたことを思うと、さして代わり映えのしない我が身を振り返って愕然とする。

大学院入学当初の指導教官は古典担当の柳沼重剛先生だった。柳沼先生の退官後、私の指導を荒木先生が引き受けてくださったのである。私の荒木先生との思い出は、にぎやかで、雑多な話題が飛び交うかつての狭い文学院生室の活気と強く結びついている。まだ、唯の「文学」の研究室は曖昧で、よく言えば自由だった。次々提供される話題についていくために必死で勉強したり、議論を延々と続けたり。いささかノスタルジックに過ぎるイメージだが、文学研究の初心者の私を受け入れてくださった荒木先生と、当時の院生の方々に感謝したい。

研究であれ、飲み会であれ、荒木先生は「真剣に」楽しむ人だ。それは今も変わらない先生のスタイルだ。何か突拍子もないことや曖昧なことをいっても、厳しい指摘と同時に、大抵そこから有効な点を拾い上げて、「面白いよ」と言ってくださる。先生ご自身の研究を話されるときも、本当に楽しんでいる、という雰囲気が伝わってくる。それが、たまたま荒木先生の指導学生となってしまった私が、いつのまにか文学研究者になった理由ではないかと思う。弟子というにはおこがましいが、学問の師としては、まず荒木先生のお名前を挙げさせていただくというのが私の現在である。荒木先生の印象のもう一つは、驚くほど勤勉だということだ。荒木先生が翻訳出版された本には大部なものも多く、しかも膨大な注が付いている。それにどれほどの労力を要したかは、私には想像するほかない。

研究者としての勤勉さや姿勢はもちろんのこと、教育者としての荒木先生の、学生への指導の懇切さも、見習わねばならないと思っている。が、思うばかりで、弟子未満のままである。